

群 教 セ	G11 - 01
	平25.249集
	中・特別活動

いじめ防止に主体的に取り組む 集団を育てる学級活動の工夫

— いじめ防止プログラムの作成・実践を通して —

長期研修員 星野 哲也

キーワード 【学級活動 中学校 いじめ防止 班活動 問題解決活動】

I 主題設定の理由

文部科学省は、「いじめの防止等のための基本的な方針」（2013）で、いじめは「どの子供にも、どの学校でも、起こりうるものである」としている。そして、いじめ問題克服のためには未然防止が重要であり、『いじめは決して許されない』ことへの理解を促し、「自己有用感や充実感を感じられる学校生活づくり」が必要としている。また、「いじめの加害・被害という二者関係」だけでなく、『観衆』としてはやし立てたり面白がったりする存在や、周辺で暗黙の了解を与えている『傍観者』の存在にも注意を払う必要があるとして、「加害者・被害者・観衆・傍観者」のいじめの四層構造に言及している。

群馬県は、「いじめ防止に向けた取組方針」（2013）で、いじめの未然防止に向けて「子どもがいじめ問題を自分のこととして考え、自ら活動できる集団づくりに努める」ことを求めている。そして「いじめ問題対策推進事業計画」（2013）を策定し、「オール群馬『いじめ防止』の取組」を示した。これを受けて、県内すべての学校において児童生徒が自ら取り組むいじめ防止活動が行われている。

平成24年度の群馬県公立中学校におけるいじめ認知件数は、文部科学省の発表によると487件で、前年度に比べ約2割増加している。いじめの内容は「ひやかし」「軽い暴力」「仲間はずれ」が上位を占めている。

そこで、いじめを未然に防ぐためには、生徒が四層構造のすべてをいじめ問題の「当事者」ととらえ、「いじめ問題を正しく理解し、自分のこととして考えようとする意識（当事者意識）」をもつことが必要であると考えた。また、生徒が自らいじめ防止のために活動できるようになるためには、学級や学校生活にかかわる諸問題を主体的に解決する力を育てることが必要であると考えた。

以上のことから本研究では、生徒に当事者意識をもたせ、問題解決に主体的に取り組む力を育てた上で、それらはいじめ防止活動に結び付けるいじめ防止プログラムを作成・実践することで、いじめ防止に主体的に取り組む集団を育てることができると考え、本主題を設定した。

II 研究のねらい

「学級活動（1）学級や学校の生活づくり」を核に、いじめの仕組みについて考える活動、問題解決を体験する活動、いじめ防止活動を考える活動、の三つからなるいじめ防止プログラムを作成・実践することを通して、いじめ防止に主体的に取り組む集団を育てることができると明らかにする。

III 研究の見通し

1 当事者意識をもたせること

班単位の活動において、いじめの仕組みについて考える活動を通して、当事者の立場や気持ちを理解させることで、生徒一人一人が当事者意識をもつことができるであろう。

2 問題解決に主体的に取り組む力を育成すること

班単位の活動において、班員同士で学級や学校生活にかかわる諸問題の解決に取り組む活動を通して、集団における問題解決の手順を理解させ、自己有用感と仲間に対する信頼感を高めることで、生徒一人一人に問題解決に主体的に取り組む力が育つであろう。

3 いじめ防止に主体的に取り組む集団を育てること

学級活動において、当事者の立場からいじめ防止を考える活動を通して、身に付けた「当事者意識」と「問題解決に主体的に取り組む力」をいじめ防止活動と結び付けることで、いじめ防止に主体的に取り組む集団が育つであろう。

IV 研究内容の概要

本研究では、三つの活動からなるいじめ防止プログラムを作成・実践する。いじめの仕組みについて考える活動（以下、活動A）では、当事者の立場や気持ちに生徒が気づきやすくなるよう、いじめの場面において当事者によく見られる発言や行動を、教師がわかりやすくまとめた自作資料を用いる。これを基に、いじめを構成する「加害者・被害者・観衆・傍観者」について生徒が考え、意見を交流する班単位の活動を行うことで、当事者意識をもつことを目指した。問題解決を体験する活動（以下、活動B）では、班員が抱える学級や学校生活にかかわる諸問題の解決を目指した班単位の活動を実践することで、生徒に集団における問題解決の手順を理解させる。そして、班員同士で感謝の気持ちを交流させることで、自己有用感と仲間に対する信頼感を高め、問題解決に主体的に取り組む力が育つことを目指した。いじめ防止を考える活動（以下、活動C）では、学級活動において、生徒が「加害者・被害者・観衆・傍観者」の四つの立場に分かれ、それぞれ「当事者が生まれる原因を取り除き、誰も当事者にさせないためにしてあげられること」を考える。これによって、当事者意識と問題解決に主体的に取り組む力がいじめ防止活動と結び付けられ、いじめ防止活動に主体的に取り組む集団が育つであろうと考えた。

V 研究のまとめ

1 成果

班単位の活動と学級単位の活動を組み合わせたいじめ防止プログラム（活動A～C）を作成し、実践したところ、次のような結果が得られた。

- 班単位で取り組ませたことが、考える時間と発言しやすい環境を与えることにつながり、生徒一人一人がいじめ問題についてしっかり考えることができた。
- 活動Aでは、工夫した自作資料を用いていじめの四層構造について考えさせたことで、生徒はいじめが身近な問題であることに気付くことができた。また、生徒は当事者の立場や気持ちを理解し、いじめを自分のこととして考えることができるようになった。
- 活動Bでは、班単位の活動において相互に問題解決をさせたことで、生徒は集団における問題解決の手順を理解することができた。また、自分が仲間の役に立てたという経験により、自己有用感と仲間への信頼感が高まり、「もっと仲間のために役立ちたい」という意識をもつことができた。
- 活動Cでは、「誰も当事者にさせないためにしてあげられること」を考えさせた。これによって、生徒は当事者の立場や気持ちを考慮したいじめ防止活動を自分たちで考え、決定し、その活動に主体的に取り組むことができた。

以上のことから、いじめ防止プログラムの実践によって、生徒が自ら集団で行動を起こす必要性を理解し、いじめ防止に主体的に取り組む集団になったと考える。

2 課題

生徒による主体的ないじめ防止活動が継続していくためには、学校全体で継続的に取り組むためのプログラムの工夫が必要である。

- 今回は中学校1年生で実践を行い成果を得たが、いじめ防止のためには、全生徒が主体的にいじめ防止活動に取り組めるようにならなければならない。生徒会活動を中心とした異学年交流をいじめ防止プログラムに位置付け、学年を超えて助け合える集団（学校）づくりが必要である。
- 生徒の活動時間確保のため、授業時間外の活動を多く取り入れたが、生徒の負担が増したり、教師による十分な指導が行えなかったりという課題が見られた。継続的な取組とするため、班単位の活動である活動Aや活動Bを、学級活動以外の授業にも位置付ける工夫が必要である。

VI 研究の内容

1 いじめ防止に主体的に取り組む集団を育てる学級活動について

(1) 「いじめ防止に主体的に取り組む集団」について

いじめの構造は「加害者（いじめる者）・被害者（いじめられる者）・観衆（周囲ではやし立てる者）・傍観者（見て見ぬふりをする者）」の四層構造であり、その構造をつくらせないことがいじめを防止することであると考えた。そこで「いじめ防止に主体的に取り組む集団」を、「生徒一人一人が『誰も加害者・被害者・観衆・傍観者にさせない』という共通の目的をもち、お互いをいじめから守るためにしてあげられることを考え、進んで取り組める学級集団」ととらえた。

(2) 「当事者意識」について

いじめを防止するには、「加害者・被害者・観衆・傍観者」のすべてに着目していじめ問題をとらえる必要がある。そこで、いじめを構成する四つの立場である「加害者・被害者・観衆・傍観者」を「当事者」と定義した。

また、いじめを未然に防ぐためには、いじめは決して許されないことを理解させ、子どもがいじめ問題を自分のこととして考えることが重要である。そこで、「いじめ問題を正しく理解し、自分のこととして考えようとする意識」を「当事者意識」と定義した。

(3) 「問題解決に主体的に取り組む力」について

当事者意識をもつことで、生徒はいじめ防止のために自分から行動する必要性に気付くと考えた。しかし、実際に行動を起こし、やりとげる力が育たなければいじめ防止にはつながらない。そこで、「問題解決に主体的に取り組む力」を、「自分たちが抱える問題に対して、話し合いにより解決策を決定し、問題の解決を図ることができる力」ととらえた。

① 「主体的」について

「主体的」とは、自分の意志・判断に基づいて行動することである。しかし、中学生という発達段階では自分に自信がもてず、分かっているにもかかわらず行動することをためらってしまう傾向が見られる。そこで、生徒が主体的に行動できるようにするために、自信をもたせ、自ら行動する意欲を喚起するための手だてが必要と考えた。

② 「問題解決に取り組む力」について

本研究における「問題解決に取り組む力」を、次のア～ウのように考えた。

ア 集団における問題解決の手順が分かる。

集団における問題解決を行うためには、個人で問題解決を行う場合と違い、他者とのやりとりが重要になる。全員が意見を出し、視点に沿った話し合いで議論を尽くして、折り合いをつけながら全員が納得する決定を導く。そして決まった役割を分担し、それぞれが責任をもって役割を果たすという「集団における問題解決の手順」を理解させることが必要である。

イ 未然防止のために、生徒が抱える問題の原因を取り除く方法を考え、実行できる。

本研究が目指すのは、いじめの未然防止である。いじめが起こってからどうするかという対症療法ではなく、起こらないようにするための方法を生徒が考えられるようにする必要がある。そのために、生徒が抱える学級・学校生活にかかわる諸問題の原因を明らかにして、それを取り除く方法を考え、実行できる力が必要となる。

ウ 問題を抱えた本人ではなく、周りの人がしてあげられることを考え、実行できる。

いじめの当事者は、自分では解決することが難しい問題を抱えていることが多い。このような当事者の抱える問題を解決するためには、周囲の助けが必要となる。そこで、生徒が抱える学級や学校生活上の諸問題を解決するために、問題を抱えた本人ではなく、周りの人が何をしてあげられるかを考え、実行できる力を生徒が身に付けることが、いじめを防止するために必要であると考えた。

2 いじめ防止プログラムについて

オール群馬「いじめ防止」の取組（2013）では、1年間を通したいじめ防止活動の流れが示された。この取組をより効果的なものとするためには、生徒の学校生活の基盤である学級において、意識的に

いじめ問題について考えさせたり、いじめ防止活動に取り組ませたりするための具体的な手だてが必要となる。そこで本研究では、学級における具体的ないじめ防止の手だてとして、表1のような三つの活動を設定し、これらをまとめて「いじめ防止プログラム」とした。なお、表中の「生活班」とは、給食当番や清掃当番、学級活動の話合いなどの単位となり、生徒が学級で生活する上での基盤となる集団である。

表1 三つの活動（いじめ防止プログラム）の概要

手だて	活動単位	活動の目的	生徒の主な活動時間
【活動A】 いじめの仕組みを考える活動	生活班	生徒一人一人が当事者意識をもつこと、問題解決に主体的に取り組む力が育つことを目指す	家庭学習 短学活
【活動B】 問題解決を体験する活動			家庭学習 学級活動 短学活 放課後・休み時間等
【活動C】 いじめ防止を考える活動	学級	生徒一人一人の当事者意識と問題解決に主体的に取り組む力が、学級集団で取り組むいじめ防止活動に結び付くことを目指す	学級活動 短学活 放課後・休み時間等

(1) いじめの仕組みを考える活動（活動A）

いじめの当事者の立場や気持ちについて学び、いじめの構造が決して特別なものではないことに気付かせることで、生徒はいじめ問題を自分のこととして考えることができるようになる。

そこで、生徒一人一人が当事者意識をもつための手だてとして、活動Aを行う。これは、図1に示された①～③の活動からなっている。生徒が活動を行いやすくなるよう、日頃から生活班における班員同士の交換日記として利用している班ノートを用いる。友達が班ノートに書いた意見を読み、それに対する自分の意見を書くことで、紙面上での交流が可能となる。

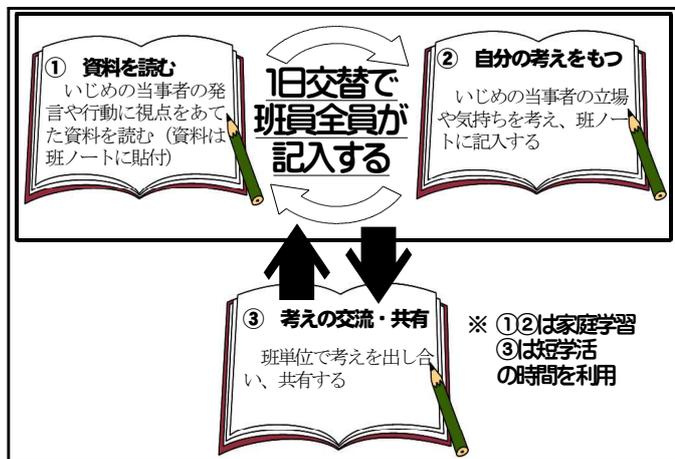


図1 活動Aの流れ

この活動によって、生徒がいじめ問題について当事者の視点から学ぶことで、いじめ問題を自分のこととして考えることができるようになる。

(2) 問題解決を体験する活動（活動B）

活動Bは、問題解決に主体的に取り組む力を育てるために、生活班ごとに班員が協力して問題解決に取り組む活動である。図2は、活動Bの全体的な流れを示したものである。

①の課題設定では、解決策を考えやすくするために、「課題が具体的であること」という視点を、また、周りがしてあげられる解決策を引き出すために、「自分だけで解決することが難しいので、班員に協力して欲しいこと」という視点を与える。

②の話合い活動では、四つの項目（「いつ」「どこで」「どうやって・どんな人に」「どうする・どうしてあげる」）に分けて解決策を付せん紙に書かせる。そうすることで、口頭で発表することが苦手な生徒も、意見を出

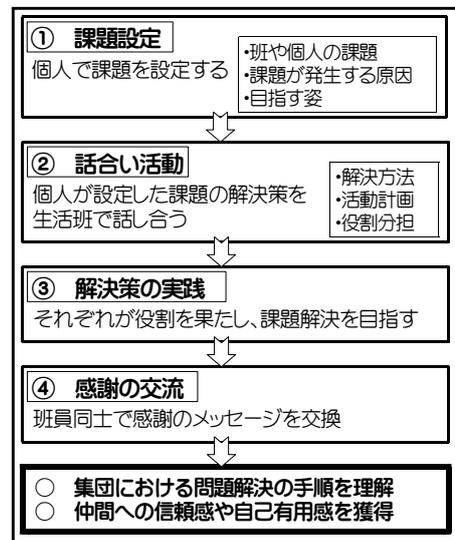


図2 活動Bの流れ

しやすくなるとともに、付せん紙を移動することによって視覚的に意見をまとめることが容易になり、解決策を検討しやすくなると考える。また、活動Cにつなげるために、「問題の原因を取り除くために何をしてあげられるか」という視点で考えることを経験させる。そして解決策に取り組むための役割分担を、班員の個性を活かしたものにさせることで生徒が自分の役割に自信をもって活動に取り組めるようになることを考える。ここまでの話し合い活動は、図3に示したワークシート1枚で行えるよう工夫した。

③では、生活班ごとに自分たちが立てた計画に従って解決策に取り組み、④では、お互いが果たした役割について感謝のメッセージを交換する。

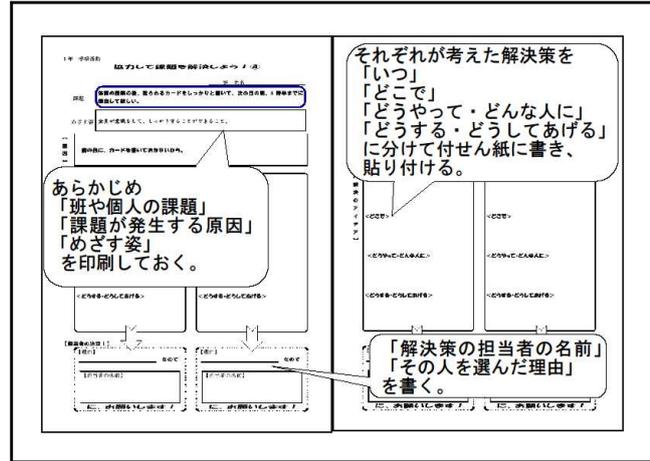


図3 解決策を話し合うためのワークシート

これら①～④の活動を通して、生徒は集団における問題解決の手順を理解し、自分の役割を意識して、集団で決定した解決策に取り組むことができるようになる。そして、自分の果たした役割が友達から認められることで自己有用感が高まったり、自分のために頑張ってくれた仲間への信頼感が高まったりして、それらを内発的動機とした問題解決に主体的に取り組む力が育つと考える。

(3) いじめ防止を考える活動（活動C）

活動Cは、学級活動の時間にいじめ防止について考える活動と、その後に生徒が実際に取り組むいじめ防止活動である。

まず、生徒はいじめ防止活動を考える自分の立場を決定するため、いじめの「当事者」となる四つの立場に分かれる。ここでは、生徒が立場を選ぶのではなく、生徒が当事者のどの立場からでもいじめ防止を考えられるようになるための機会ととらえ、教師がグループ分けを行う。

次に、活動Aで学んだ「当事者」の立場や気持ちから明らかになった「当事者が生まれる原因」を基に、「当事者となる原因を取り除き、誰も当事者にさせないためにしてあげられること」という視点でいじめ防止活動を考える。ここでは、生徒の話し合いの時間を確保するために、話し合いの進め方や注意点などを簡潔に示した「話し合いポイントカード」（図4）を用いる。また、活動Bで学んだ問題解決の手順に沿っていじめ防止活動を考えさせるとともに、生徒が考えたいじめ防止活動の比較・検討を視覚的に評価することで、視点に沿った適切な話し合いを促すための「ポジショニングマップ」（図5）を取り入れる。これは、生徒が考えたいじめ防止活動を、「自分たちでできるかどうか」「原因を取り除くのに有効かどうか」の2項目で評価するもので、「当事者となる原因を取り除き、誰も当事者にさせないいじめ防止活動を考える」という視点に沿った話し合いにするた

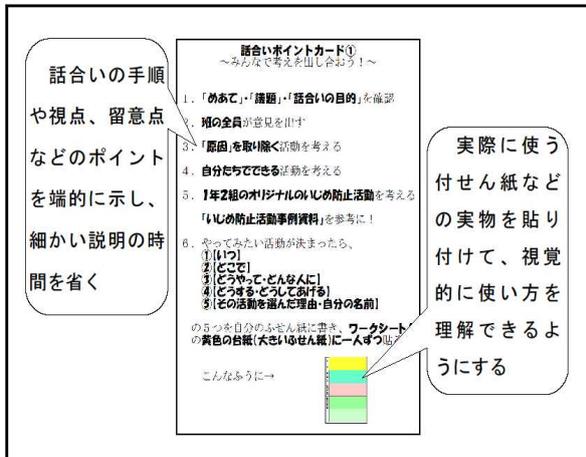


図4 話し合いの手順やポイントを明記した「話し合いポイントカード」

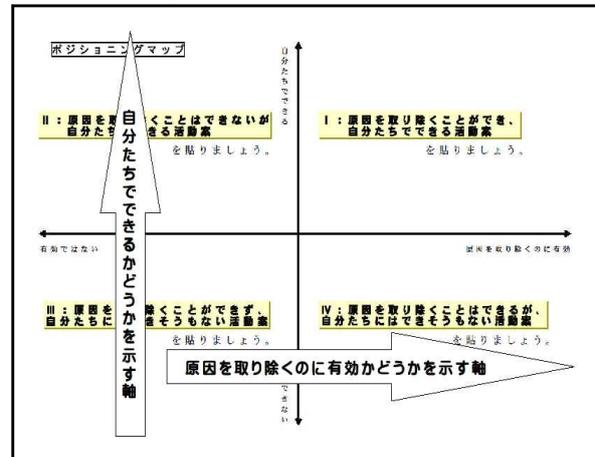


図5 縦軸と横軸に評価の視点を設定した「ポジショニングマップ」

めに有効であると考えた。さらに、「いじめ防止の取組の事例」（全国の学校で実際に生徒が行っているいじめ防止活動を教師がまとめたもの）を参考にさせることで、具体的ないじめ防止活動をイメージできるようにし、視点に沿って考えることが難しい生徒を支援する。

このようにして、学級で取り組んでいくいじめ防止活動を決定していくことで、これまでに身に付けてきた生徒一人一人のいじめに対する当事者意識と問題解決に主体的に取り組む力がいじめ防止活動と結び付けられ、いじめ防止に主体的に取り組む集団を育てることができると考える。

3 研究構想図



Ⅶ 実践の計画と方法

1 授業実践の概要

対象	研究協力校 中学校第1学年 31名
実践期間	平成25年8月29日～10月18日
単元名	「いじめを防止するために自分たちにできることを考えよう」
単元の目標	いじめを自分のこととして考えるとともに、自分たちにできる「誰も当事者にさせないいじめ防止活動」を考えることができる。

2 検証計画

研究の見通し	検証の観点	検証の方法
○ 班単位の活動において、いじめの仕組みについて考える活動を通して、当事者の立場や気持ちを理解させることで、生徒一人一人が当事者意識をもつことができるであろう。	○ いじめの仕組みを考えさせたことは、生徒が当事者意識をもつ上で有効であったか。 ○ 班単位の活動を取り入れたことは、生徒一人一人の意識を高める上で、有効であったか。	○ 観察（事前・事中・事後の発言や態度）など ○ 班ノートの記述内容

研究の見通し	検証の観点	検証の方法
○ 班単位の活動において、班員同士で学級や学校生活にかかわる諸問題の解決に取り組む活動を通して、集団における問題解決の手順を理解させ、自己有用感と仲間に対する信頼感を高めることで、生徒一人一人に問題解決に主体的に取り組む力が育つであろう。	○ 付せん紙を使い、解決策を四つの項目に分けて考えさせたことは、解決策を考えやすく、かつ発表や検討をしやすくするために有効であったか。 ○ 個性を活かした役割分担や、感謝の気持ちの交流を取り入れたことは、主体的に活動するための意欲を高める上で有効であったか。 ○ 問題解決活動を体験させたことは、生徒が集団における問題解決の手順を理解する上で有効であったか。	○ ワークシートの記述内容 ○ アンケートの結果
○ 学級活動において、当事者の立場からいじめ防止を考える活動を通して、身に付けた「当事者意識」と「問題解決に主体的に取り組む力」をいじめ防止活動と結び付けることで、いじめ防止に主体的に取り組む集団が育つであろう。	○ 当事者の立場から「誰も当事者にさせないいじめ防止活動」を考えさせたことは、生徒が活動Aで身に付けた当事者意識といじめ防止活動を結び付けて考える上で有効であったか。 ○ 複数の考えをまとめる話合いに、ポジショニングマップを取り入れたことは、視点に沿った適切な話合いを促す上で有効であったか。 ○ 自分たちで考えたいじめ防止活動に取り組ませたことは、活動Bで身に付けた問題解決に主体的に取り組む力といじめ防止活動を結び付けいじめ防止に主体的に取り組む集団を育てる上で有効であったか。	

3 評価規準

集団活動や生活への関心・意欲・態度	学級や学校の生活の充実と向上にかかわる問題に関心を持ち、他の生徒と協力して、自主的、自律的に集団生活に取り組もうとしている。
集団の一員としての思考・判断・実践	学級や学校の一員としての自己の役割と責任を自覚し、他の生徒の意見を尊重しながら、集団におけるよりよい生活づくりなどについて考え、判断し、信頼し支え合って実践している。
集団活動や生活についての知識・理解	充実した集団生活を築くことの意義や、学級や学校の生活づくりへの参画の仕方、学級集団として意見をまとめる話合い活動の仕方などについて理解している。

4 指導計画

(1) 活動A（いじめの仕組みを考える活動）

月 日	学習活動	研究上の手だて
9月10日(火) 短学活	○ 活動Aの目的・手順等を知る。	○ 活動の全体像を示し、生徒が見通しをもって取り組めるようにする。
9月10日(火) 10月18日(金) 家庭学習	○ 教師が創作したいじめに関する自作資料を読み、登場人物の立場でそのときの気持ちやどう行動すればよいかなどを考え、班ノートに書く。 ○ 他の班員の考えを読み、感じたことを班ノートに書く。	○ いじめに関する話は、身近に起こりやすい具体例を取り上げ、自分がいついじめにかかわることになるかわからないという意識をもてるようにする。また、必要最低限の要素だけで話を構成するようにして、ねらいの焦点化を図る。 ○ 班ノートを使うことで、班員同士の考えを交流させ、深めさせる。
9月18日(水) 9月26日(木) 10月3日(木) 10月10日(木) 10月18日(金) 短学活	○ 班員同士で意見を交流し、思いや考えを共有する。 ○ いじめの四層構造について知り、いじめの場面における当事者それぞれの立場や気持ちについて考える。	○ 生活班の中で考えの共有を図る。 ○ いじめの四層構造を提示し、話の中の人物が果たした役割と結び付けて考えさせることで、当事者意識をもたせる。

(2) 活動B（問題解決を体験する活動）

月 日	学習活動	研究上の手だて
8月29日(木) 9月10日(火) 短学活 家庭学習	○ 活動Bの目的・手順等を知る。 ○ 自分の課題を設定する。	○ 活動の全体像を示し、生徒が見通しをもって取り組めるようにする。

月 日	学習活動	研究上の手だて
9月11日(水) 学級活動	<ul style="list-style-type: none"> ○ 班員一人一人の課題に対して、付せん紙を用いて解決方法を出し合い比較・検討する。 ○ 生活班での話し合いにより、それぞれの課題に対する解決方法と班員の受けもつ役割を決定する。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 「いつ」「どこで」「どうやって・どんな人に」「どうする・どうしてあげる」の四つの項目に分けて書かせ、解決方法を考えやすくする。 ○ 付せん紙を用いることで、考えを出しやすくするとともに、解決策を比較・検討しやすくする。 ○ 出されたすべての解決策について視点を与えて考えさせることで、活動のねらいに沿った考えを導く。 ○ 一人一人の個性にあった役割を与え、活動に対する意欲を高める。
9月12日(木) } 9月13日(金) 短学活	<ul style="list-style-type: none"> ○ 学級活動において自分たちで決めたことを実行するため、生活班ごとに活動計画を作成する。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 自分がいつ・どこで・何をするのかをはっきりさせることで、責任をもって取り組めるようにする。
9月17日(火) } 10月17日(木) 休み時間 放課後等	<ul style="list-style-type: none"> ○ 生活班で作成した計画に基づき、課題解決活動に取り組む。 ○ 活動が終了したら、お互いに感謝のメッセージを交換し、活動を振り返っての感想を書く。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 感謝のメッセージを交換させることで、自己有用感と仲間に対する信頼感を高め、次の問題解決活動への意欲につなげる。
(3) 活動C (いじめ防止を考える活動)		
月 日	学習活動	研究上の手だて
10月18日(金) 学級活動	<ul style="list-style-type: none"> ○ 活動Cの目的・手順等を知る。 ○ 「加害者」「被害者」「観衆」「傍観者」の四つの集団に分かれ、「誰も当事者にさせないためにしてあげられること」を話し合い、いじめ防止の具体的な活動を決定する。 ○ 役割の分担を決める。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 活動の全体像を示し、生徒が見通しをもって取り組めるようにする。 ○ 当事者の立場から考えさせることで、誰も当事者にさせないいじめ防止活動を考えられるようにする。 ○ ポジショニングマップを用いて、比較・検討を視覚化することで、視点に沿った適切な話し合いを促す。 ○ 一人一人の個性にあった役割を与え、活動に対する意欲を高める。
○ 以降は、生徒による主体的ないじめ防止活動が行われる。		

VIII 研究の結果と考察

班活動において、いじめに対する当事者意識をもたせ、問題解決に主体的に取り組む力を育てた上で、学級活動で自分たちにできるいじめ防止活動を考えさせるいじめ防止プログラムの実践を行ったところ、いじめ防止に主体的に取り組む集団を育てることができた。

1 当事者意識をもたせること

(1) 活動Aの結果

① いじめにかかわる話を読み、当事者の立場や気持ちを考えて記述する活動

今回の実践では、当事者の様々な立場や気持ちを考えさせるため、内容の異なる資料を用いて、5回の活動を行った。班ノートの記述内容を見ると、生徒は同じ班の中で他者の意見に流されてしまうこともなく、自分の考えをしっかりと書くことができていた。他の生徒の意見に賛同し、かつ自分の意見も付け加えるというような書き方も見られ、他者の意見と比較して考えている様子もうかがえた。また、当事者の立場や気持ちを意識した記述としては、次の表2に示したようなものが見られた。

表2 班ノートの記述例

当事者の立場	生徒の記述例
加害者	<ul style="list-style-type: none"> ○ 怒っていて、先のことが考えられなくなっていた。 ○ 相手が怒らないからいつも言ってしまう。
被害者	<ul style="list-style-type: none"> ○ 誰かに話すと、もっといじめがひどくなると思ったから。 ○ 親や先生に心配をかけたくなかったから。
観衆	<ul style="list-style-type: none"> ○ いたずら心やふざけ半分から。 ○ もっと面白くしようという気持ち。
傍観者	<ul style="list-style-type: none"> ○ 自分が次にいじめられることを恐れたから。 ○ 一人じゃ怖いから何人かで注意すればよかったと思う。

② 生活班ごとの意見交流の場面

生活班ごとの意見交流では、班員の考えを共有するとともに、表3に示したような考えの相違について話し合う様子が見られた。

表3 意見交流で話し合われた内容の例

話し合われた内容	
○ 「観衆」が、「『被害者』が『加害者』の悪口を言っていた」と『加害者』に告げ口をする場面で、「観衆」の発言は「親切心だ」とする考えと「いたずら心だ」とする考え	
○ 「傍観者」が、「被害者」がいじめられている場面に遭遇し、「被害者」に見て見ぬふりをする場面で、「『被害者』を助けるべきだ」と「助けたいができないので困っている」という考え	

(2) 考察

① いじめの仕組みを考えさせたことの有効性

活動Aに関する事後アンケートの結果（一部）は、図6のようになった。いじめの仕組みを考えさせたことによって「いじめには四層構造がある」ことが分かった生徒は90%、「自分もいついじめにかかわることになるかわからない」と思った生徒は60%であった。さらに、「以前から分かっていた・思っていた」と回答した生徒を含めると、どちらも96.7%であった。これらのことから、今回のいじめの仕組みを考える活動は、生徒にいじめの四層構造を理解させるとともに、これまで自分はいじめ問題とは関係ないと思っていた生徒に、いじめを自分のこととして考えさせるために有効であったと考えられる。

また、いじめについての正しい理解を問う「相手が嫌だと思えば、それはいじめである」「いじめは理由にかかわらず絶対に許されない行為である」という二つの設問については、活動Aが終了した時点で分かったと答えた生徒の割合は前者が80%、後者が93.3%であった。ほとんどの生徒は、いじめについて正しい理解をしている様子が見える。

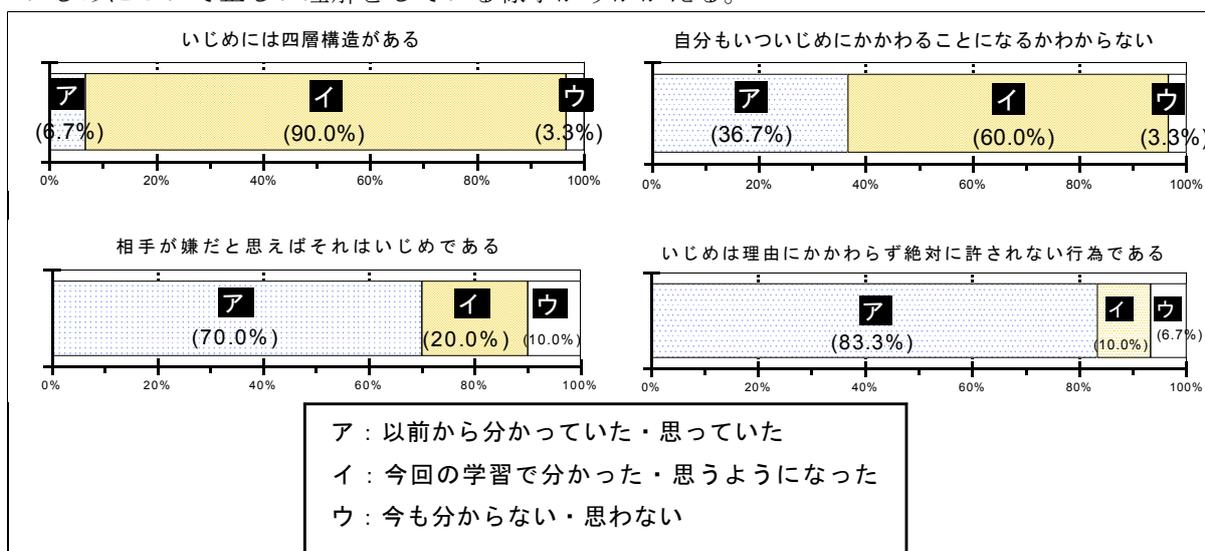


図6 活動Aに関するアンケートの結果（一部）

② いじめの仕組みについて考えさせるために生活班を取り入れたことの有効性

ア いじめの仕組みについて考えさせるために班ノートを用いたことの有効性

生徒の負担を軽減し、活動を行いやすくするため、学校生活で日常的に使っているものを利用しようと考え、班ノートを用いた。その結果、活動後に「普段使っている班ノートで学習したので、やりやすかった」と感じた生徒は87.1%であった。また、自由記述に表4のような記述が見られた。

表4 活動Aに関するアンケートの結果 生徒の自由記述（1）

生徒の自由記述の内容	
○	普段書いている時間にまとめてできるので、新しく時間をつくらずに済むのでよかった。
○	班の人がどう思っているのかを知ることができたので、そこもよいところだと思った。
○	短時間でできるし、話し合いにもつながるのでとてもよいと思った。

この他、班ノートの使いやすさや、友達の考えが見えることを利点としてあげた記述が多く見られた。(1)の結果と合わせて考えると、いじめの仕組みを考えさせる手段として班ノートを用いたことは、生徒の負担を減らし、生徒同士の意見を交流させるために有効であったと考えることができる。

イ いじめの仕組みについて生活班で話し合わせたことの有効性

アンケートの結果から、「班でいじめ（の仕組み）について話し合ったことは、意見交換がしやすかったのでよかった」と感じた生徒は83.9%、「班で話し合いをしたことで、自分と同じ考えや自分とは違った考え方があることが分かった」と回答した生徒は96.8%であった。また、自由記述に表5のような記述が見られた。

表5 活動Aに関するアンケートの結果 生徒の自由記述(2)

生徒の自由記述の内容
○ 人それぞれ考えていることが違うから、友達が思っていることを取り入れながら、いじめ防止法を考えていきたいと思う。
○ 周りの人の意見と自分の意見を組み合わせながら、一番いい形に考えをもっていけるように、もっと自分なりに考えていじめのないクラスづくりに協力して、それを叶えられるようなクラスをつくっていきたくて思いました。

このような活動Aに関するアンケートの結果から、生徒は生活班で話し合ったことに対して、話し合いのしやすさを感じていることが分かる。また、話し合いの中で自分と異なる意見を受け入れ、折り合いをつけて一番よい方法を考えようとしている様子が見られる。これは、学習形態として生活班を取り入れたことで、共通の体験や話題が多い同じ班の生徒の中で話し合いが行われたことが、意見交流をしやすい環境を生んだためと考える。そして少人数で考えさせたことが、生徒一人一人に考える責任と発言の機会を与え、自分の意見をもたせることにつながったためと考える。

以上の①・②より、班単位でいじめの仕組みについて考える活動を行う活動Aを実施したことは、生徒一人一人がいじめ問題に対する当事者意識をもつために有効であったと考えられる。

2 問題解決に主体的に取り組む力を育成すること

(1) 活動Bの結果

① 課題設定の場面

課題が具体的でなければ、解決策も具体的にはならない。また、課題が「周りの人が手伝えること」でなければ、「周りの人がしてあげられる」解決策を見付けることは難しい。そこで、課題設定の際に「具体的であること」や「自分だけで解決することが難しいので、班員に協力して欲しいこと」という二つの視点をもたせた。そして、具体的な課題を例示し、「いつ、どこで、だれが」を意識した課題の書き方を繰り返し指導した。すると、最初は「うるさい」や「協力して欲しい」など、抽象的な課題を考えていた生徒も、徐々に具体的な課題へと変わっていった。生徒が考えた「班や個人の課題」「課題が発生する原因」「目指す姿」の一部を表6に示す。

表6 生徒が考えた「班や個人の課題」「課題が発生する原因」「目指す姿」の例

班や個人の課題	課題が発生する原因	目指す姿
ア 授業中にうるさい人がいる。	○ 問題が早く終わった人や、分からなくて暇な人がいるから。	○ みんなが集中して授業に取り組む。
イ まだ、新しい友達とあまり話すことができない。	○ 自分から話しかける勇気がないから。	○ 自分から話せる。
ウ 体育の授業の後、配られるカードをしっかりと書いて期限までに提出して欲しい。	○ 前の日にカードを書いておかないから。	○ 全員が意識をしてしっかりと守ることができること。

② 解決策を話し合う場面

班員が設定した課題について、他の班員がそれぞれ解決策を考え、「いつ」「どこで」「どうやって・どんな人に」「どうする・どうしてあげる」の四つの項目に分けて付せん紙に書き、ワークシート上に貼り付けた。そして、「問題の原因を取り除くことができるか」「周りの人がしてあげられることになっているか」という二つの視点で出された解決策を比較・検討し、班で取り組む解決策を決定することができた。生徒は解決策を話し合う中で、項目ごとに貼られた付せん紙を移動させることで、同じ意見をまとめたり、視点に沿っているかどうかの検討をしたりしていた。生徒が設定した課題（表6）に対して、話し合いで決定した解決策を、表7に示す。

表7 解決策の例（表中ア～ウは表6のア～ウに対応）

	解 決 策
ア	○ 授業中、教室で、問題などが早く終わった人は、問題などが終わってない人に教えてあげる。 ○ 授業中、教室で、やることがない人は、他の人を手伝ってあげる。
イ	○ 気付いた時、学校で、友達と一緒に、私が話しかける。 ○ 学校にいる時、教室・廊下で、友達に、一緒になって話しかける。
ウ	○ ライフ（連絡帳）を書く時に、教室で、連絡事項に「カードを書いて提出する」と書いてもらうよう呼びかけ、家で書いてきてもらう。

③ 役割分担の場面

採用された解決策について役割分担をする場面では、「班員のよいところや特技などを基に考える」という視点を与えた。その結果、生徒は「数学が得意」「励ましがうまい」「声を通る」など、それぞれの個性を活かして分担している姿が見られた。

④ お礼のメッセージ交換の場面

それぞれの課題解決活動に取り組んだ後、お礼のメッセージ交換を行った。結果として自分の課題が解決しなかった生徒も多かったが、自分の課題に対して一生懸命考え、協力してくれた仲間に対して感謝の気持ちを伝えることができた。

(2) 考察

① 付せん紙を使い、解決策を「いつ」「どこで」「どうやって・どんな人に」「どうする・どうしてあげる」の四つの項目に分けて考えさせたことの有効性

事後アンケートにより、表8のような結果が得られた。

表8 活動Bに関するアンケートの結果（一部）

質 問 項 目	割 合
「いつ」「どこで」「どうやって・どんな人に」「どうする・どうしてあげる」の四つに分けたので考えやすかったと感じた生徒	86.2%
付せん紙を使ったので自分の意見を発表しやすかったと感じた生徒	92.8%
付せん紙を使ってみんなの意見をワークシートに貼り付けたので、比べやすかったと感じた生徒	96.5%

この結果から、付せん紙を使って解決策を四つの項目に分けて考えさせたことが、生徒が考えるべきポイントを明確に示すとともに、考えを短い言葉で簡潔に表現させることにつながり、解決策を考えやすく、かつ発表や検討をしやすくするために有効であったと考える。

② 個性を活かした役割分担や感謝の気持ちの交流を取り入れたことの有効性

事後アンケートの結果、「それぞれの個性を活かした分担ができた」と感じた生徒は93.1%、「自分にあった役割なので、頑張っやりとげようという気持ちになった」とした生徒は93.1%で、個性を活かした役割分担をさせたことが活動の意欲につながったと見ることができる。

また、お礼のメッセージを交換したことで「仲間から感謝され自分が役に立てたと思えたので、次も頑張ろうという気持ちになった」「自分の課題解決に協力してもらえたので、自分も仲間の課題解決に協力したいと思った」と答えた生徒はそれぞれ93%であった。自分が役に立てたという自

己有用感の高まりと、自分のために頑張ってくれた仲間に対する信頼感の高まりが、次の活動に対する意欲に結び付いたと考えられる。

③ 問題解決活動を体験させたことの有効性

事後のアンケートの結果、今回の活動によって「集団における問題解決の手順が分かった」と答えた生徒は92%であった。問題解決活動を体験させたことは、主体的に課題を解決するために必要となる知識である「問題解決の手順」を理解させるために有効であったと考えられる。

以上の①～③より、生活班で問題解決を体験する活動を行う活動Bを実施したことは、生徒一人一人に問題解決に主体的に取り組む力を育てるために有効であったと考える。

3 いじめ防止に主体的に取り組む集団を育てること

(1) 活動Cの結果

① 個別にいじめ防止活動を考える場面

生徒は、「加害者」「被害者」「観衆」「傍観者」のそれぞれの立場に分かれ、「当事者が生まれる原因を取り除き、誰も当事者にさせないためにしてあげられること」を視点として、個別にいじめ防止活動を考えてきた。ここでは、活動の流れやポイントが示された「話し合いポイントカード」に沿って活動を進めさせるとともに、「いじめ防止の取組の事例」を参考にさせたり、教師が机間支援の中で視点について繰り返し確認を行ったりした。その結果、生徒が考えたいじめ防止活動は、最初は視点に沿った考え方が浸透せずに対症療法が多かったが、徐々に視点に沿ったいじめ防止活動が見られるようになった。また、生徒は図7に示した付せん紙に書き込むことで、具体的な活動を書くことができた。生徒の考えたいじめ防止活動の例として、表9に「被害者」が生まれる原因、表10に「被害者」の立場で考える生徒が考えたいじめ防止活動の案を示す。

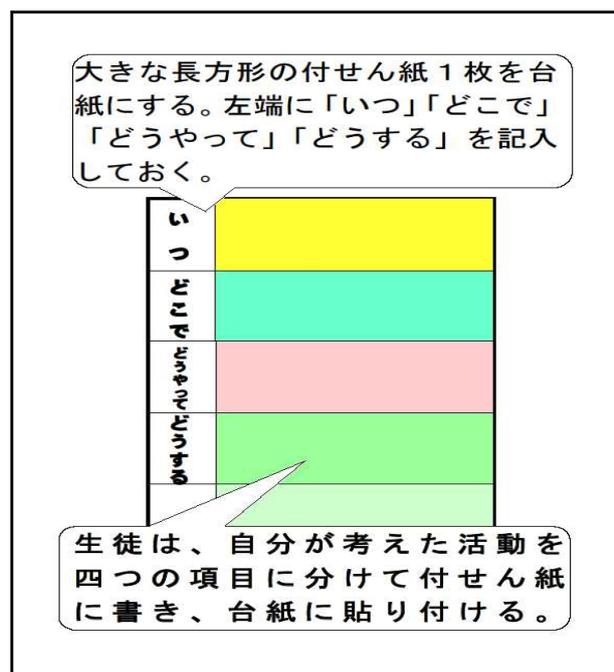


図7 項目別に記入できるように工夫した付せん紙

表9 生徒に示した『被害者』が生まれる原因

「被害者」が生まれる原因
<input type="radio"/> 個性の違いを認めてもらえない。苦手なことや失敗など、悪い面ばかり責められてしまう。
<input type="radio"/> 自分からは他の人に相談しづらい。
<input type="radio"/> 自分が悪いと思いつみ、黙って耐えてしまう。

表10 「被害者」の立場から考える生徒が考えた『被害者』を生まないための活動

「被害者」を生まないための活動
<input type="radio"/> 相談しづらい人、黙っている人に、自分から相談にのってあげる。
<input type="radio"/> 自分から話しかけて相談しやすい環境をつくる。
<input type="radio"/> 長所を見つけてほめてあげる活動をする。
<input type="radio"/> 責める人たちに、責められている人のよいところを教えてあげる。
<input type="radio"/> 苦手なことを努力して、認めてもらう。

② 比較・検討の場面

生徒が考えた「誰も当事者にさせないためのいじめ防止活動」を、ポジショニングマップを用いて検討した。班長を中心として活発に意見を出し合い、「自分たちでできるか」「原因を取り除く

のに有効か」の二つの視点からそれぞれの活動案を分類した。そして、「いじめ防止の取組の事例」を参考にして、より具体的な活動として実際に自分たちが取り組む活動を決定した。表11にその結果を示す。

表11 決定した各班の「いじめ防止活動」

立場	いじめ防止活動の内容	生徒の製作物
加害者の立場	<p>「お悩みボックス」</p> <p>【目的】</p> <p>「自分の怒りやねたみ、ストレスをコントロールできない」「自分自身が悩みを抱えている」という「加害者が生まれる原因」を取り除く。</p> <p>【内容】</p> <p>悩みやイライラすることを用紙に書いて投函してもらい、相談にのるという活動。これによって、みんなの気持ちを穏やかにすることで、誰も加害者にさせないようにする。</p>	
被害者の立場	<p>「Goodsmile31」</p> <p>【目的】</p> <p>「自分が悪いと思い込み、黙って耐えてしまう」という「被害者が生まれる原因」を取り除く。</p> <p>【内容】</p> <p>クラスの31人全員に笑顔になってもらうため、よかったことや、「～してくれてありがとう」を募集し、短学活で発表したり、表彰したりする活動。これによって、みんなが自分に自信をもつことで、誰も被害者にさせないようにする。</p>	
観衆の立場	<p>「白くまのまーちゃん」</p> <p>【目的】</p> <p>「いじめられる方にも問題がある、または、原因があると思ってしまう」という「観衆が生まれる原因」を取り除く。</p> <p>【内容】</p> <p>級友のよいところを投函してもらい、白くまのまーちゃんに食べさせることで、お腹をいっぱいにしようという活動。投函されたよいところを、模造紙に貼り教室に掲示する。これによって、みんなの意識を「よいところを見よう」という意識に変えることで、誰も観衆にさせないようにする。</p>	
傍観者の立場	<p>「フレンドリーBOX」</p> <p>【目的】</p> <p>「いじめられているのは自分ではないから関係ないと思っている」という「傍観者が生まれる原因」を取り除く。</p> <p>【内容】</p> <p>級友のすごいと思うところや見習うべきところを見つけて投函してもらい、それを発表していく活動。これによって、みんながお互いを認め合うことで、みんなが友達であるという意識を高め、誰も傍観者にさせないようにする。</p>	

③ いじめ防止活動の実践

当事者のそれぞれの立場から取り組むいじめ防止活動が決定した後、生徒はすぐに活動に取りかかり、休み時間や放課後、短学活等を利用して必要な道具の作成や学級の生徒への活動の説明・呼びかけを行った。学級全体がそれぞれの活動に協力し、意欲的にいじめ防止活動に取り組んでいる様子が見られた。例えば、「観衆」の立場から考えたいじめ防止活動「白くまのまーちゃん」では、集まった「みんなのよいところ」を図8

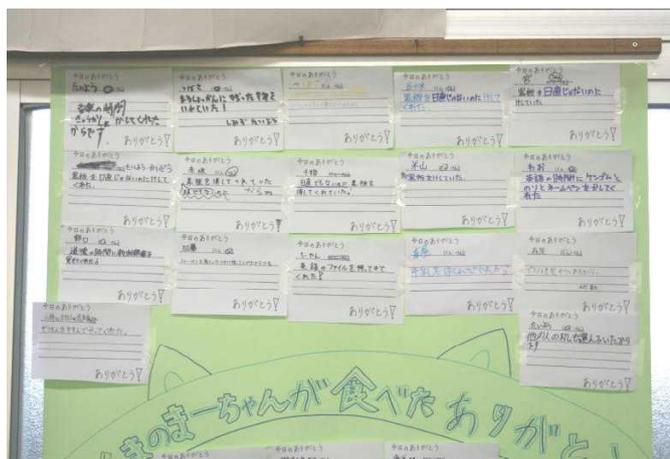


図8 教室に掲示された「みんなのよいところ」

のように教室に掲示した。するとそれを見た生徒が、自分の名前を見つけて「自分も友達のよいところを見付けたい」と思ったり、模造紙が埋まっていく様子を見て「もっとたくさんよいところを見付けたい」と思ったりすることで、活動が広がっていった。

(2) 考察

① 当事者の立場から「誰も当事者にさせないいじめ防止活動」を考えさせたことの有効性

アンケートの結果、活動Cを通して「誰も加害者・被害者・観衆・傍観者にしないという意識をもって活動できた」という生徒は90%、「いじめを防止するためには、加害者・被害者・観衆・傍観者の立場や気持ちを考えることが大切である」と感じた生徒は94%であった。生徒が、活動Aで学んだ「当事者の立場や気持ち」を考慮しながら、いじめ防止活動を決定していった様子が分かる。実際に、加害者の立場から考えた活動は、加害者が生まれる原因として挙げられた「自分の怒りやねたみ、ストレスをコントロールできない。自分自身が悩みを抱えている」に対して、加害者自身の悩みや不満を解決するための活動であった。また、観衆の立場から考えた活動は、観衆が生まれる原因として挙げられた「いじめられる方にも問題がある、またはいじめられる方に原因があると思ってしまう」に対して、「誰でもよいところがあることを分かってもらおう」ための活動であった。このように、どの立場から考えた活動も、当事者の立場や気持ちを考慮したいじめ防止活動となっていた。当事者の立場から、「誰も当事者にさせない」いじめ防止活動を考えさせたことは、生徒が活動Aで身に付けた当事者意識といじめ防止活動を結び付けて考えさせる上で有効であったと言える。

② 複数の考えをまとめる話合いに、ポジショニングマップを取り入れたことの有効性

「原因を取り除くのに有効か」と「自分たちでできるか」の二つの視点を軸としたポジショニングマップを用いて解決策を分類させたことで、生徒は自分たちが考えた解決策について視点に沿った話合いを行い、適切に分類することができた。例えば、「被害者」の立場から考える班は、「(被害者を)責める人たちに、責められている人のよいところを教えてあげる」という解決策を、「自分たちでできそうだが、原因を取り除くのに有効ではない」の位置に分類した。これは、「責められている時に(よいところを)教えたのでは遅い」という意見によるもので、「原因を取り除くのに有効か」という視点を与えたことが「未然防止の考え」を引き出し、適切な分類につながったと考えられる。また、「(責められている人が)苦手なことを努力して、認めてもらう」という解決策を、「原因を取り除くのに有効だが、自分たちにはできない」の位置に分類した。これは、「苦手なことをただ努力しろというのは、言われる側には難しいのではないか」という意見によるもので、「自分たちでできるか」という視点を与えたことが、「当事者の視点で考える」ことを引き出したと考えられる。

以上のことから、複数の考えをまとめる話合いの場面にポジショニングマップを取り入れたことは、視点に沿った適切な話合いを促す上で、有効であったと考える。

③ 自分たちで考えたいじめ防止活動に取り組ませたことの有効性

いじめ防止活動に取り組ませた後に実施したアンケートの結果（一部）を、表12に示す。

表12 いじめ防止活動実施後のアンケートの結果（一部）

質問項目	肯定の割合
班で決めたいじめ防止活動に進んで取り組むことができた。	97%
自分の果たした役割が、クラスのいじめを防止するために役に立った、またはこれから役に立つと思う。	93%
いじめを防止するためには、自分たちで行動を起こすことが大切である。	93%
これからも自分たちで考え、話し合い、協力して、いじめを防止するための活動を行っていききたい。	93%
いじめ防止活動を行ったことで、クラス全体がいじめを防止しようという気持ちで行動できるようになった。	90%

これらの五つの質問項目に対して、肯定意見の割合がすべて90%以上だったことから、生徒は今回の実践を通して、いじめを防止するために自分の力が役に立つことや、自分たちで行動を起こすことの大切さを知ることができたと考える。その上で、学級集団としてこれからも自分たちでいじめ防止に取り組んでいききたいと考えることができるようになった。また生徒の自由記述の中には、「いじめ防止は一人が思うだけでは何もできないと思った。クラスの皆で協力して、行動しなければ止めることはできないことだと学ぶことができた」という意見があった。ほかにも、「これからも協力して自分たちでいじめ防止のために活動していききたい」という内容を書いた生徒が多く見られた。

これらのことから、自分たちで考えたいじめ防止活動に取り組ませたことは、活動Bで身に付けた一人一人の問題解決に主体的に取り組む力といじめ防止活動を結び付け、いじめ防止に主体的に取り組む集団を育てる上で有効であったと考える。

IX 研究の成果と課題

1 成果

今回の実践を行う前に、「いじめを防止しよう」という議題で学級活動を行い、いじめを防止するために取り組む活動を生活班で話し合った。その結果、六つの生活班のうち五つが「自分がされて嫌なことはしないようにしよう」、一つが「嫌なことをされたら誰かに相談しよう」という内容であった。これらは、当事者に解決を求めるものであり、当事者意識に欠けるものであった。

それに対して、実践後に生徒が考え取り組んだいじめ防止活動は、「当事者を生まないように、周囲の仲間にしてあげられること」を集団で実現した取組であった。いじめ問題の解決を個人に任せるのではなく、生徒自らが集団で行動を起こす必要性を理解できたことは、大きな成果である。よって今回の実践は、「いじめ防止に主体的にかかわる集団」を育てる上で有効であったと考える。

2 課題

- 活動時間を確保するために、家庭学習や短学活の時間を利用する計画を立てたが、家庭学習では教師の指導が十分にできず、短学活では日程変更や学校行事の影響で時間の確保が難しかった。生徒の活動をできるだけ精選し、プログラムの効率化を図っていく必要がある。
- 一度の実践では、今回の活動の趣旨に沿った課題や解決策を考えることは、やや難しいものであったと思われる。そのため、実際の活動に入るまでに多くの指導の時間を要してしまった。普段から学級活動等で様々な問題解決に取り組ませ、集団で問題解決を行う活動を繰り返し経験させていく必要がある。

X いじめを防止するために

1 複数の教科・領域を通じたいじめ防止への取組

本研究では、中学校の学級活動を核としたいじめ防止へのアプローチを図った。しかし、今回課題となった、生徒の活動時間と教師の指導時間を確保するためには、学級活動の時間だけでは難しい。これを解決するために、様々な教科・領域を通じた取組が考えられる。当事者の心情に迫る「いじめについて考える活動（活動A）」を道徳で、繰り返し多くの体験を積ませたい「問題解決を体験する活動（活動B）」は総合学習や教科の時間における多様な問題解決活動と組み合わせる、などの工夫ができると考える。そうすることで、生徒の活動や体験の機会を増やすとともに、教師の指導の下に生徒を活動させる時間を確保することができると考える。また、それぞれの教科等において、人権教育の視点などと合わせていじめ防止の視点を設定し、いじめ防止への取組を計画的に進めていくことも大切であると考ええる。

2 学校全体でのいじめ防止への取組

本研究では、いじめ防止を早い段階から意識させるという点と、生活環境が変わり生徒の人間関係に変化が起こる時であるという点から、中学校1年生を対象として実践を行った。しかし、いじめはどの学年にも起こる可能性があるため、2・3年生を対象とした発達段階に応じたプログラムを追加し、中学校3年間での系統的ないじめ防止への取組を行っていくことが必要である。また、生徒会活動と関連付けることで、生徒が学年を超えて助け合う主体的ないじめ防止活動を行い、学校全体に「いじめからみんなを守ろうとする意識や態度」を醸成していくことが有効であると考ええる。そして、すべての生徒がいじめ防止に主体的に取り組む学校をつくることが、いじめを未然に防ぎ、生徒が安心して生活できる学校をつくることになると思う。

<参考文献>

- ・朝日新聞社会部 著 『葬式ごっこ』 東京出版(1986)
- ・朝日新聞山形支局 著 『マツト死事件 見えない“いじめ”の構図』 太郎次郎社(1994)
- ・杉田 洋 著 『よりよい人間関係を築く特別活動』 図書文化(2009)
- ・玉聞 伸啓 著 『いじめと戦おう!』 小学館(2011)
- ・松本 宏樹 朝日学生新聞社 編 『明日がくる』 東京書籍(2007)
- ・森田 洋司 著 『いじめとは何か 教室の問題、社会の問題』 中公新書(2010)
- ・森田 洋司 清水 賢二 著 『新訂版 いじめ 教室の病い』 金子書房(1994)
- ・矢部 武 著 『間違いだらけのいじめ対策』 P H P (2008)
- ・渡辺 健介 著 『世界一やさしい問題解決の授業』 ダイヤモンド社(2007)
- ・渡辺 真由子 著 『大人が知らないネットいじめの真実』 ミネルヴァ書房(2008)

<研究協力校>

邑楽町立邑楽中学校

<研究協力者>

塩原 幸徳

<担当指導主事>

中村 清志 國峯 智

資料編 目次

ページ	資料の内容
1	資料編クイックマニュアル（資料の使い方を示す簡易マニュアル）
2～5	自作資料 【A1】～【A7】
6	生活班での意見交流のためのワークシート 【A8】
7	課題を設定するためのワークシート 【B1】
8, 9	解決策を話し合うためのワークシート 【B2】
10	課題の解決計画を立てるためのワークシート 【B3】
11	活動Bの取組を評価するためのワークシート 【B4】
12	お礼のメッセージを書くワークシート 【B5】
13,14	お礼のメッセージを貼るワークシート 【B6】
15,16	いじめ防止活動案を出し合うワークシート 【C1】 （加害者の立場から考えるパターン）
17	被害者・観衆・傍観者が生まれる原因を示した資料 【C2】
18	ポジショニングマップ 【C3】
19	話し合いポイントカード① 【C4】
20	話し合いポイントカード② 【C5】
21	話し合いポイントカード③ 【C6】
22,23	いじめ防止活動の役割分担をするワークシート 【C7】
24	いじめの四層構造を示す図 【C8】
25,26	学習指導案（活動C 本時の展開） 【C9】

資料編クイックマニュアル

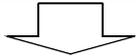
いじめ防止プログラムでは、次の三つの活動を行います。

☆事前の活動 [活動Aと活動Bは平行して行うことが可能]

◎活動Aの進め方 ※ () 内は所要時間の目安

- ① 4～6人の班[生活班]の中で、資料を貼ったノートを回覧し、それぞれの考えを書かせる。(一人10分程度)

使用する資料:【A1】～【A7】のいずれか一つを選択



- ② 班の中で意見交流を行わせる。(15分)

使用する資料:【A8】

※【A1】以外を使用した場合、【A8】の質問項目を変えて対応する必要があります。



- ③ ①に戻り、まだ使っていない資料で繰り返す。

◎活動Bの進め方

- ① 課題を設定させる。(20分)

使用する資料:【B1】



- ② 【B1】を回収し、班名・生徒氏名・課題・めざす姿・原因を別ファイルに入力し、【B2】に差し込み印刷をする。

付箋紙と【B2】を配り、解決策を話し合わせる。(人数×10分)

使用する資料:【B1】 【B2】



- ③ 活動計画を立てさせる。(20分)

使用する資料:【B3】



※解決策を実践

- ④ 【B4】に自分の感想、【B5】に仲間への感謝の気持ちを書かせる。(30分) 交換後、【B6】に貼らせる。(20分)

使用する資料:【B4】 【B5】 【B6】

☆本時の活動

◎活動Cの進め方

【C9】本時の展開を参照

活動A 当事者意識をもたせるための自作資料

【A1】怒りが冷静さを失わせること 軽はずみな周囲の言動がいじめを促進すること

【A1】

○中学1年のAさんとBさんは、小学校の時から親友である。ある時、好きなアイドルのことでAさんがBさんをけなしたため、Bさんを怒らせてしまう。その日、同級生のCさんからBさんに、「AがBの悪口を言っていた。」とメールが届く。怒ったBさんは、Cさんに「クラス全員にAを無視するよというメールを送ろう。」と誘う。Cさんは、「早くやろうぜ!」とBさんをせかした。

【考えてみよう】

- ① Bはなぜ、親友のAを無視するようなメールを送ったのでしょうか。
- ② Cは、なぜBに 部のようなメールを送ったのでしょうか。また 部のよう
返事をしたときのCはどんな気持ちだったと思いますか。
- ③ BとCが、Aに対してしようとしていることはいじめになると思いますか。理由ととも
に自分の考えを書きましょう。
- ④ このような結果にならないために、A・B・Cの3人は、今回のような場合どう行動
すればよかったと思いますか。

【A2】過剰なからかいが特定の人物に集中すること 周囲の問題意識が低いこと

【A2】

○Dさんは読むことが苦手で、声も小さく、文章を読むのに時間がかかる。そのたびに、きまってEさんとFさんが、「早くしろ～」「聞こえませ～ん」とからかう。すると何人かの人
が「そうだそうだ!」と言いだし、それを聞いた他のみんなは、クスクスと笑い出す。他にも
読むのが遅い人はいるけど、Dさんの時はいつもこうになってしまう。

【考えてみよう】

- ① EさんとFさんはなぜ、Dさんをからかうような発言をするのでしょうか。
- ② 他にも読むのが遅い人はいるのに、なぜDさんの時だけこのようになってしまったと思
いますか。
- ③ このようなことは、Dさんに対するいじめになると思いますか。もしなるとすれば、
いじめているのは誰ですか？もしならないとすれば、このことによってDさんはどん
な気持ちになっていると思いますか。理由とともに自分の考えを書きましょう。
- ④ このようなことにならないために、このクラスの人たちはどう行動すればよかったと
思いますか。

【A3】いじめられる方も悪いと思ってしまうこと いじめる側が100%悪いこと

【A3】

○Gさんは明るく元気な女の子だが、おっちょこちょいなところがあり困っている。ある日、班のみんなが書いた作文を進んでGさんが集めてくれたのだが、その作文をうっかりなくしてしまった。そのため、Gさんの班は全員作文を書き直すことになってしまった。Gさんは班のみんなに謝ったけれど、その日以来、班のみんなはGさんを見捨てるようになった。他の班の人たちも、「当然だよな。」と言わんばかりに一緒に無視したり、黙って見ていたりするだけだった。その後、Gさんは元気がなくなり、やがて頻繁に学校を休むようになった。

【考えてみよう】

①これはGさんに対するいじめです。あなたの考えに一番近いのは次のどれですか。

ア：Gさんに原因があるのだから、いじめられるのは当然だ。

イ：いじめはいけないことだが、Gさんに原因があるから、仕方がないことだ。

ウ：Gさんにどんなミスがあったとしても、いじめについてはいじめる方が悪い。

②いじめを防止するためには「いじめは、いじめる側が100%悪い。」という意識を全員でもつことが必要です。なぜいじめる側が100%悪いのか、この話を基にその理由を考え、書いてみましょう。

【A4】一見仲良しでもいじめが生まれる可能性があること 周りは気づきにくいこと

【A4】

○Hさん、Iさん、Jさんは昔からの仲良し3人組。でも最近Jさんは困っている。性格的に断れないのをいいことに、HさんとIさんになんでも押しつけられている気がするのだ。「ごめん、Jちゃんこれ片付けといて!」、「Jちゃん宿題やっとないてね!」、「めんどくさいからJちゃんやっとないて!」、「いいじゃん、Jちゃんがやれば。」などなど。ある時Jさんが「たまにはIちゃんもやったら?」って言ったら、「今回だけ、ね、お願いっ!」と言われて結局Jさんがやることに。そんな3人をいつも見ている友達のKさんは、「いいね、三人は仲良しで!」と言ってるけど・・・。

【考えてみよう】

①HさんやIさんは、Jさんのことをどう思っているのでしょうか。

②Jさんは、HさんやIさんのことをどう思っているのでしょうか。また、これからどうしていきたいと思っているのでしょうか。

③Kさんには、なぜ3人が仲良しに見えるのでしょうか。

④いじめるつもりがなかったとしても、相手が嫌だと思ふことをすることは、いじめにつながる可能性があります。今後いじめにつながらないように、⑦HさんとIさん、⑧Jさん、⑨Kさんにそれぞれ出来ることは何か、考えてみよう。

【A5】いじめと分かっているけど、何もしてあげられない理由があること

【A5】

○僕は、Lくんとは幼なじみで大の仲良しだ。中学に入ると、LくんはクラスのMくんからいじめを受けるようになった。僕は「気にすんなよ。」といいながらLくんと遊んでいたが、ある日Mくんから「Lと話すなら、次はおまえだ。」と言われた。次の日廊下を歩いていると、LくんがMくんのグループに囲まれ、いじめられていた。Lくんは僕に助けを求めたが、僕はそのまま通り過ぎてしまった。「なんでだよ！助けてくれよ！」泣きながら僕を呼ぶLくんの声を聞きながら、僕はその場から走り去ることしかできなかった。

【考えてみよう】

- ①「僕」は、なぜLくんを無視し、黙って走り去ることしかできなかったのでしょうか。
- ②今回ではなく、今後、Lくんと「僕」の両方が嫌な思いをしなくてすむにはどうしたらよいか、「僕」があなたにアドバイスを求めてきたとしたら、どんなアドバイスをしますか。『「僕」がどう行動したらよいか』を考え、具体的に教えてあげてください。

【A6】いじめられる側には、いじめを公にしたい理由があること

【A6】

○去年の夏、Nくんのミスにより、チームは県大会出場を逃した。それ以来、部の中でNくんに対するいじめが始まった。私はいつも隣のコートでその様子を見ていて、その度にいじめる男子に注意していたけれど、まったくいじめが止む様子はなく、それどころかひどくなる一方だった。そのうち私に向かって悪口が飛ぶようにもなった。ある時、「もうさ、親とか、先生に話しなよ。あいつら言ってもわからないから。」とNくんに話したら、「いや、話したくないんだ。ありがとう。」とだけ言って、悲しそうに帰ってしまった。

【考えてみよう】

- ①Nくんはひどいいじめを受けているにもかかわらず、なぜそのことを親や先生に話したくないのでしょうか。その理由を考えられるだけ考えてみよう。
- ②今回ではなく、今後、Nくんと「私」の両方が嫌な思いをしなくてすむにはどうしたらよいか、「私」があなたにアドバイスを求めてきたとしたら、どんなアドバイスをしますか。『「私」がどう行動したらよいか』を考え、具体的に教えてあげてください。

ぐんまの子ども「いじめ防止宣言」

私たちは、いじめを必ずなくすことができると信じ、いじめの問題から目を背けずに、私たち自身の問題として考えます。

そして、笑顔にあふれた学校生活のために、自分から行動を起こすことを約束し、ここにいじめ防止を宣言します。

一 勇気

わたしたちは、困っている人がいたら、自分のこととして考え、進んで行動します。

一 思いやり

わたしたちは、相手のことを思い、お互いを大切にします。

一 協力

わたしたちは、周りの人とよい関係をつくり、何事にも全員で取り組みます。

平成25年8月18日

群馬県いじめ防止サミット

- ① _____ 部のように、いじめを「私たち自身の問題として考える」とは、どういうことだと思いますか。
- ② _____ 部「自分から行動を起こす」必要があるのは、なぜでしょう。
- ③ ~~~~~ 部のように行動することが、なぜ「勇気」の項目に入るのでしょうか。自分が実際にいじめの現場を目撃したつもりになって考えてみましょう。
- ④ 本当に相手を思いやり、協力していじめを防止するために、③のようなときあなたにできることはどんなことだと思いますか。考えてみましょう。

活動A 班で意見交流をするためのワークシート

【A8】

_____班

<いじめの四層構造>

【加害者】・・・いじめる生徒。

【被害者】・・・いじめられる生徒。

【観衆】・・・はやし立てたり、面白がったりして見ている生徒。
いじめを積極的に良いと認める立場の生徒。

【傍観者】・・・見て見ないふりをする生徒。口には出さないがいじめに賛成し、
後押しする。その結果、いじめを進行させる。

いじめ問題は、これら四つの立場から考える必要があります。

1. 今回の場合、【加害者】【被害者】【観衆】【傍観者】にあたるのはそれぞれ誰だと思いますか。班で意見を出し合い、考えましょう。(該当するものがない場合は空欄)

【加害者】	【被害者】
【観衆】	【傍観者】

2. 今回の場合、いじめを起こさないためにA、B、Cの3人が気をつけなければならなかったことは何でしょうか。班で意見を出し合い、考えましょう。

<Aくん>	<Bくん>
<Cくん>	

協力して課題を解決しよう！①

組 班 氏名

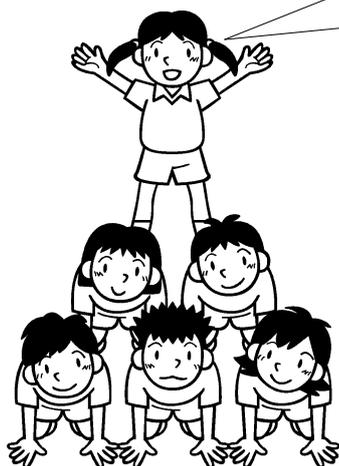
1. 自分や班の具体的な課題を1つ考えよう！

【注意！！】 課題は次の3点に注意して作ろう。

- ・ その課題は【誰の課題なのか】、【どんな時に起こるのか】、【何が課題なのか】、【なぜそれが課題なのか】が分かるように書こう。
- ・ 自分一人では解決が難しいけれど、班の人に手伝ってもらえば何とかかなりそうなことを考えよう。
- ・ 課題は個人的過ぎないこと。また、難しすぎないこと。

2. 1で考えた課題が発生する原因は何か、自分の考えを書こう。

3. 班やあなたがどんな状態になれば1が解決したといえますか。目指すゴールの姿を書こう。



一人では難しくても、
みんなで協力すれば、
いろんなことができるよ！

協力して課題を解決しよう！②

項 班 氏名 項目 2

課題

項目 3

めざす姿

項目 4

【原因】

項目 5

【解決のアイデア】

<いつ>

<どこで>

<どうやって・どんな人に>

<どうする・どうしてあげる>

<いつ>

<どこで>

<どうやって・どんな人に>

<どうする・どうしてあげる>

【担当者の決定！】

【理由】

_____ なので

【担当者の名前】

に、お願いします！

【理由】

_____ なので

【担当者の名前】

に、お願いします！

1. **原因を取り除いてめざす姿に近づく**ために、班の仲間として**何をしてあげられるか**を考え、思いついた事をどんどん付箋に書いて貼っていきましょう。ただし、問題が起きてからどうするか、ではなく、問題が起こらないようにする方法を考えてください。必ず1人1つはアイデアを出しましょう!

2. アイデアが出尽くしたら、1で出された解決策について、

① **課題を出した人だけが自分で行う解決策**になっていないか。

② **班の仲間だけでできる**ことか。

③ それによって**原因を取り除き、めざす姿に近づくことにつながる**か。

を話し合しましょう。話し合った結果、もしできそうもないことだったり、解決に関係ないことだったりしたら、解決策から外しましょう。

3. 班で決めた解決策を全員で分担して、実行します。どの解決策を、誰が担当するのがよいか、**班員のよいところや特技などをもとに考えましょう**。その際、必ず**全員が役割を分担**するようにします。もし解決策が1つしか無ければ、その解決策に全員で取り組みましょう。

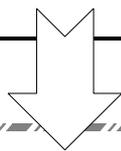
「
解
決
の
ア
イ
デ
ア
」

<いつ>

<どこで>

<どうやって・どんな人に>

<どうする・どうしてあげる>



【理由】 _____ **なので**

【担当者の名前】 _____

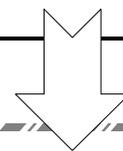
に、お願いします!

<いつ>

<どこで>

<どうやって・どんな人に>

<どうする・どうしてあげる>



【理由】 _____ **なので**

【担当者の名前】 _____

に、お願いします!

協力して課題を解決しよう！③

組 班 氏名

仲間のための課題解決計画

1. 班で分担した自分の役割を書き、実施する計画を立てましょう。

※評価：○よくできた △まあまあできた ×できなかった

<勤>	<いつ>	<どこで>	<どうやって・どんな人に>	<どうする・どうしてあげる>	反省・感想	評価

自分自身の課題解決計画

2. 自分の課題を解決するために、自分が頑張ることを書きましょう。

自分						
----	--	--	--	--	--	--

協力して課題を解決しよう！④

組 班 氏名

<自分の課題について>

1. 今回の活動で班員の協力によってあなたが設定した課題は解決しましたか？（1つに○をつける）

㊶ 解決した！

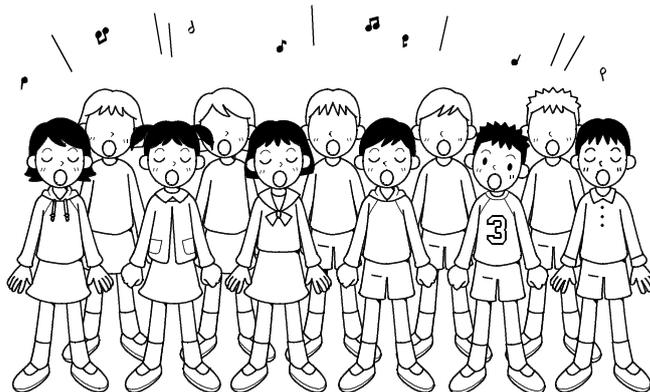
㊷ だいたい解決した

㊸ あまり解決しなかった

㊹ 解決しなかった

2. 今回あなたが設定した課題について、班のみんなで協力して解決に取り組んだ活動を通して、感じたことや思ったこと、考えたことなどを書きましょう。

3. これから班の友達の課題を解決するために行動する時、または今後友達が困っている場面に遭遇した時、あなたはその友達に対してどんな気持ちで行動しようと思いますか。



協力して課題を解決しよう！⑤

組 班 氏名

○自分の課題の解決に協力してくれた班員全員へメッセージを書き、切り取って渡しましょう。渡すときに感謝の気持ちを込めて一言添えられるといいですね！

----- 切り取り線 -----

☆ **仲間にお礼のメッセージ**

より

_____ ^

----- 切り取り線 -----

☆ **仲間にお礼のメッセージ**

より

_____ ^

----- 切り取り線 -----

☆ **仲間にお礼のメッセージ**

より

_____ ^

----- 切り取り線 -----

☆ **仲間にお礼のメッセージ**

より

_____ ^

----- 切り取り線 -----

協力して課題を解決しよう！⑥

組 班 氏名

- もらったお礼のメッセージを貼ろう。
- 枠の中には、メッセージを読んだ感想と、今後自分の周りに困っている友達がいたらどうしたいと思うか、自分の気持ちを書こう。

一人目



- もらったお礼のメッセージを貼ろう。
- 枠の中には、メッセージを読んだ感想と、今後自分の周りに困っている友達がいたらどうしたいと思うか、自分の気持ちを書こう。

二人目



-
- もらったお礼のメッセージを貼ろう。
 - 枠の中には、メッセージを読んでの感想と、今後自分の周りに困っている友達がいたらどうしたいと思うか、自分の気持ちを書こう。

三人目



-
- もらったお礼のメッセージを貼ろう。
 - 枠の中には、メッセージを読んでの感想と、今後自分の周りに困っている友達がいたらどうしたいと思うか、自分の気持ちを書こう。

四人目



☆今回の「協力して課題を解決する活動」を通して、思ったことや感じたことを下に書きましょう。

いじめ防止のために 自分たちでできることを考えよう！

【話し合いの目的】

仲間を誰も<加害者>にしないために、
自分たちでできることを考える。

【解決のアイデア】

【活動案A】

<いつ>
<どこで>
<どうやって・どんな人に>
<どうする・どうしてあげる>
<この方法を選んだ理由・自分の名前>



【担当者の名前】
に、お願いします！

【活動案B】

<いつ>
<どこで>
<どうやって・どんな人に>
<どうする・どうしてあげる>
<この方法を選んだ理由・自分の名前>



【担当者の名前】
に、お願いします！

【加害者が生まれる原因】

- ・自分の怒りやねたみ、ストレスをコントロールできない。我慢できない。
- ・自分自身が悩みを抱えている。
- ・相手が困っていることに気が付かない。相手の気持ちが分からない。
- ・いじめに対する罪悪感がない。

【解決のアイデア】

【活動案C】

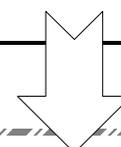
<いつ>
<どこで>
<どうやって・どんな人に>
<どうする・どうしてあげる>
<この方法を選んだ理由・自分の名前>



【担当者のお名前】
に、お願いします！

【活動案D】

<いつ>
<どこで>
<どうやって・どんな人に>
<どうする・どうしてあげる>
<この方法を選んだ理由・自分の名前>



【担当者のお名前】
に、お願いします！

活動Cワークシート C1 補助資料

【話合いの目的】

仲間を誰も<被害者>にしないために、
自分たちでできることを考える。

【被害者が生まれる原因】

- ・個性の違いを認めてもらえない。苦手なことや失敗など、悪い面ばかりを責められてしまう。
- ・自分からは他の人に相談しづらい。
- ・自分が悪いと思いつみ、黙って耐えてしまう。

【話合いの目的】

仲間を誰も<観衆>にしないために、
自分たちでできることを考える。

【観衆が生まれる原因】

- ・いじめられる方にも問題がある、またはいじめられる方に原因がある、と思ってしまう。
- ・「いじめではなく遊びだ。」と勝手に思いつみ、おもしろがっていじめに加わってしまう。

【話合いの目的】

仲間を誰も<傍観者>にしないために、
自分たちでできることを考える。

【傍観者が生まれる原因】

- ・助けてあげたいけれど、自分もいじめられそうで怖いと思っている。
- ・いじめられているのは自分ではないから、関係ないことだと思っている。

自分たちでできる

II : 原因を取り除くことはできないが自分たちでできる活動案

を貼りましょう。

I : 原因を取り除くことができ、自分たちでできる活動案

を貼りましょう。

有効ではない

原因を取り除くのに有効

III : 原因を取り除くことができず、自分たちにはできそうもない活動案

を貼りましょう。

IV : 原因を取り除くことはできるが、自分たちにはできそうもない活動案

を貼りましょう。

できない

話し合いポイントカード①

～みんなで考えを出し合おう！～

1. 「**めあて**」・「**議題**」・「**話し合いの目的**」を確認
2. **班の全員**が意見を出す
3. 「**原因**」を取り除く活動を考える
4. **自分たちでできる**活動を考える
5. **自分たちのオリジナルのいじめ防止活動**を
考える

「**いじめ防止活動事例資料**」を参考に！

6. やってみたい活動が決まったら、
 - ① **いつ**
 - ② **どこで**
 - ③ **どうやって・どんな人に**
 - ④ **どうする・どうしてあげる**
 - ⑤ **その活動を選んだ理由・自分の名前**

の五つを自分のふせん紙に書き、**ワークシートA**
の**黄色の台紙(大きいふせん紙)**に**一人ずつ**貼る

話し合いポイントカード②

～みんなの考え（いじめ防止活動案）を
検討しよう！～

1. 「**めあて**」・「**議題**」・「**話し合いの目的**」を確認
2. **全員が意見を出し、全員の意見を聞く**
3. 次の視点で活動案を**分類する**
 - ・ **有効**かどうか
 - ・ **できる**かどうか
4. **どこが、なぜ**有効なのか、有効でないのか
どこが、なぜできるのか、できないのか

理由をはっきりさせて、発言する

5. 話し合った結果、

「**有効**」で「**できる**」もの

「**有効ではない**」が

「**できる**」もの

「**有効**」だが「**できない**」もの

「**有効ではない**」し

「**できない**」もの

ポジショニングマップの

→ I の場所に

→ II の場所に

→ III の場所に

→ IV の場所に

大きいふせんの台紙ごと貼り付ける

6. **I の場所に貼られたもの**が取り組む活動

話し合いポイントカード③

～いじめ防止活動を役割分担しよう！～

1. 「**めあて**」・「**議題**」・「**話し合いの目的**」を確認
2. **全員が意見を出し、全員の意見を聞く**
3. 取り組むことになった活動は、
台紙ごと**ポジショニングマップ**から**ワークシートA**に
戻し、担当者を決める
4. ワークシートBに自分が取り組む活動を書く
5. 活動に**必要な役割**を話し合う

それぞれの**個性や特技、よいところ**を生かす
理由をはっきりさせて発言する

自分の役割をワークシートBに書く

いじめ防止のために 自分たちでできることをしよう！

氏名 _____

【話合いの目的】

- ・自分たちが取り組むいじめ防止活動に必要な役割を話合い、メンバーそれぞれの長所を生かして役割を決める。

<自分が担当するいじめ防止活動>

○仲間を誰も（加害者・被害者・観衆・傍観者）にしないために、

<自分の役割>

<この時間の振り返り> 自分がどうだったか を答えましょう。	そう思う ←————→ 思わない
1. 自分の意見をしっかり出せましたか。	4 3 2 1
2. 自分の考えの理由を述べることができましたか。	4 3 2 1
3. みんなの考えをしっかりと聞くことができましたか。	4 3 2 1
4. お互いの考えを大切に話合いができましたか。	4 3 2 1
5. みんなのよいところを生かした役割分担ができましたか。	4 3 2 1
6. 話合いで学級の問題を解決する方法が分かりましたか。	4 3 2 1
7. 今日決まったいじめ防止活動と自分の役割を、 しっかりやっと思っていますか。	4 3 2 1

<この時間に考えたことや思ったことを書きましょう>

※時間が余ったら、友達が頑張っていたところをふせん紙に書き、渡してあげよう！

<活動計画>

自 分 が や る こ と	必要なもの

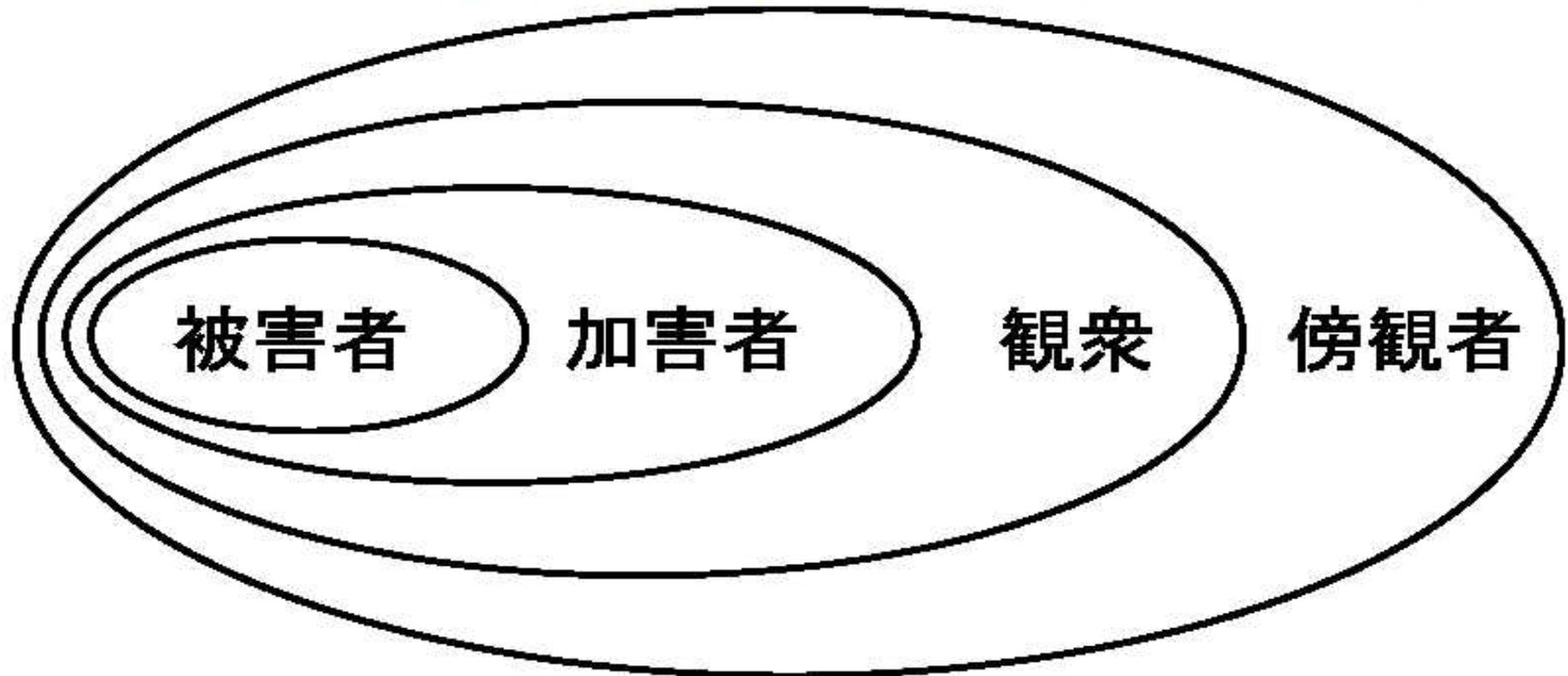
<活動の記録>

日 時	<ul style="list-style-type: none"> ・こんな事を頑張ったら、みんなはこんな反応をしてくれたよ！ ・自分のしたこんな事が、みんなの役に立ったよ！ ・ここはもう少しこうしたかったな・・・など、具体的に書こう！ 	自己評価

※自己評価は、

A（とてもよくできた）、B（よくできた）、C（あまりできなかった）、D（ほとんどできなかった）
の四段階で、あてはまるアルファベットを書き込むこと。

いじめの四層構造(森田 洋司 1986年)^{【C8】}



観 衆：いじめを積極的に是認

傍観者：いじめを暗黙的に支持し、促進

5 本時の展開

【C9】

- (1) ねらい いじめ防止のために自分たちにできることを考え、話し合いにより集団決定することができる。
- (2) 準備 ワークシート（C1、C3、C7） 付せん紙 話し合いポイントカード（C4～C6）
いじめ防止活動事例資料 議題・めあて・いじめ四層構造の図（C8）等の掲示物
- (3) 展開

学習活動 予想される生徒の反応	時間	○指導上の留意点及び支援・評価 (◎努力を要する生徒への支援 ◇評価)
<p>1 議題と提案理由、めあての確認を行う。</p> <p>(1)本時の議題と活動のめあてを知る。</p> <p style="background-color: #ffff00; padding: 2px;">[議題] いじめを防止するために自分たちにできることを考えよう。</p> <p style="background-color: #ffff00; padding: 2px;">[めあて] お互いの考えを大切に話し合いをしよう。</p> <p>(2)話し合いを行う際の注意点を知る。</p>	<p>10分</p>	<p>○事前準備</p> <ul style="list-style-type: none"> ・グループ分け ・資料配付（C1、C3～C7） <p>○議題とめあてを確認し、これまでの事例学習や課題解決活動を振り返らせ、学んだことを本時に生かそうという意欲を高める。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・いじめを構成する四つの立場があり、それぞれの立場で考える必要があること ・嫌だと思いをすればいじめだということ ・話し合うことで、協力して課題解決できること <p>○「誰もいじめの【加害者】【被害者】【観衆】【傍観者】（以下、【四つの立場】）にさせないために、自分たちにできる防止策を考える。」という話し合いの方向性を明確に示しておく。</p> <p>○話し合いは「議題」・「めあて」・「話し合いポイントカード」に従い進めることを確認する。</p> <p>○【四つの立場】が生まれる原因をあらかじめ提示することで、話し合いの焦点化を図る。</p>
<p>2 話し合い（集団討議）</p> <p>(3)【四つの立場】が生まれる原因をもとにいじめ防止のために自分たちにできることを考える。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・活動案を【いつ】【どこ】【どうやって・どんな人に】【どうする・どうしてあげる】【選んだ理由】の5つの項目に分けて付せん紙に書き、ワークシートA（C1）上の台紙に貼り付ける。 <p>(4)班員から出された活動案を吟味し、実際に取り組む活動を話し合っ決めて。</p>		<p>○話し合いポイントカードは次の3種類に分けて提示し、生徒がポイントをおさえやすくする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・考えを出し合う場面用（C4） ・出された考えを検討する場面用（C5） ・役割を割り振る場面用（C6） <p>◎いじめ防止活動の事例をまとめた資料（いじめ防止活動事例資料）を提示し、具体策を考えるきっかけとする。</p> <p>○他校の活動をまねるのではなく、このクラスオリジナルのいじめ防止活動を考えるよう促す。</p> <p>○ワークシートAから活動案の書かれた付せん紙を台紙ごととはがし、吟味したうえでポジショニングマップ（C3）に貼るよう指示する。</p>

<p>・ポジショニングマップを使い、</p> <p>①原因を解消できるか。</p> <p>②自分たちにできるか。</p> <p>を視点として吟味する。</p> <p>・吟味した活動案を、台紙ごとポジショニングマップのⅠ～Ⅳに貼り付ける。</p> <p>(5)ワークシートB(C7)を使って、決定した活動を役割分担する。</p> <p>(6)【四つの立場】の代表が、これから取り組んでいく活動を発表する。</p>	<p>35分</p>	<p>○同じ内容の活動案は、提案者の了解を得た上で台紙ごと一つにまとめるよう指示する。</p> <p>○ポジショニングマップ上の活動案の散らばり具合によって支援を行う。</p> <p>・Ⅰに集中している場合は、よりよい活動にするためにはどうしたらよいかを話し合うとともに、優先順位を考えるよう促す。</p> <p>・Ⅰに一つも活動案がない場合は、Ⅱ～Ⅳの活動案をⅠにするためにどこを改善すればよいかを話し合うよう促す。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;"> <p>◇自他の意見を尊重し、折り合いをつけながら話し合いをすることができる。</p> <p>【思考・判断・実践】</p> </div> <p>◎すべての班員の意見を聞き、全員が納得するまで話し合うよう促す。</p> <p>○役割を割り振る際には、これまでに取り組んだ課題解決活動の様子を振り返らせ、それぞれがもつよさを生かして役割を割り振るよう助言する。</p> <p>○全体で確認することで、学級としてどんないじめ防止活動を行っていくのかを共有できるようにする。</p>
<p>3 振り返り</p> <p>(7)本時の活動を振り返り、ワークシートで自己評価をする。</p>	<p>5分</p>	<p>○自己評価が終わったら、他のメンバーの頑張っていた点を付せんに書き、交換させることで、お互いの頑張りを認め合えるようにする。</p>

(4) 板書計画

○【傍観者】をださないうために
(原因) (解決策)

○【観衆】をださないうために
(原因) (解決策)

○【被害者】をださないうために
(原因) (解決策)

○【加害者】をださないうために
(原因) (解決策)

十月十八日(金)
学級会

めあて お互いの考えを大切にして
話し合いをしよう

議題 いじめを防止するために
自分たちができることを考えよう

みんなで
取り組む
いじめ防止
活動

↓

いじめの
四層構造の図